

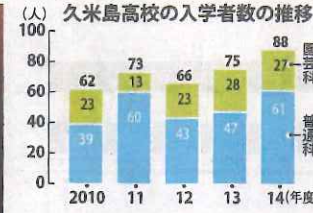
離島留学 かけける夢

久米島高校ルポ

街もなほ夜道に、影がでるほつ月明かりが差。都立は同じとしたとない自然の雄大さ。荒井竜馬君(16)はこの島に来てよかったと心底思った。(鈴木秀)

荒井君は久米島高校の1年 少しいる。生。東雲の中学校を昨年春に卒業後、世田谷区の実家を離れて久米島町に単身渡った。「中3になって進路を考えたい。関東を離れて外の世界に出たい思いがどんどん膨らんできた。離島医療に関心があるので、この島がちょうどいい」と。普通科の特進クラスで学び、医学部進学を目指している。

久米島は、那覇空港から飛行機で30分余。1950年代半ばに1万7千人を超えていた人口は現在、8300人ほどに半減した。ここ10年は毎年100人近くのペースで減っている。普通科の特進クラスで学び、医学部進学を目指している。



船出の年となった本年度は県外から2人、沖繩本島から



教育

教育に関するご意見や情報をお寄せください
社会部教育班
電話 098(860)3552
ファクス 098(851)5300
※日・水曜日に掲載します。

生徒 未来描く新天地 学校 地域振興に期待

3人の計男女5人が入学した。うち4人は、町教委が探した島の里親と暮らしながら学校に通う。

半導通校長は「島の外から来た生徒は部活に励んだり、勉強で刺激を与えたり、農作業を楽しんだり。これまでに女子生徒ばかりだった生徒会も、荒井君たちが加わって活気づいた。すつかり島に溶け込んでいきます」と喜ぶ。2年目となる来年度も東京



音楽の授業で、友達と笑い合う荒井竜馬君(中央)＝12月18日、久米島高校

魅力伸ばす

久米島の長所は、小人数ならではの面倒見のよさや地域社会の結び付きの強さ、多様な自然環境、といった個性をのびのびと伸ばすこと。地元の人や町議会、保護者などは久米島高校の魅力化と発展を促す声をおおきく発せってきた。高校と密接な連携を取りながら、さまざまなお取り組みを進めている。

里親が課題

荒井君の里親は、赤嶺貫さん(69)とみよさん(63)夫妻。ともに元教員。「島のためになるなら」と引き受けた。5人の子どものうちすでに成人し、部屋が空いていることも後押しした。普段の弁当は息子夫婦が用意してくれる。学校までは車で通学する。君は自転車通学する。

寮と公営塾

県外や島外から生徒を呼び込むためには、学習環境を充実させることも重要な鍵を握ると町はみている。「十分な学力が身に付くのか」といった不安を持つ保護者も多かった。

や神奈川、沖繩本島などから10人ほどが入学を希望している。半導校長は「島の中学生だけでは、定員を満たすだけの絶対数が足りない。県外、県外から生徒が来れば、たまたま卒業後に故郷へ帰ったとしても5年後、10年後に島の心遣いになってくれるはず。地方創生のモデルケースにもなる可能性がある」と期待を寄せていた。

現代版組踊の練習をする中村修真君(前左)＝12月19日、久米島町農村環境改善センター

全国で小中高70校超

離島留学 希望者数伸び悩む

日本離島センター(東京)によると、離島留学は約30年前に新潟県・佐渡島が始まり、九州地方を中心に広がった。小中学生が1年間、地元の受け入れ家庭(里親)や寮で暮らす。島の学校に通うのが一般的。2014年11月現在、全国で小中学校約70校と高校